

歴史の傍観者とならないために －主体的かつ深く考える歴史の授業－

研究の背景・目的

生徒たちが、これからの予測困難な時代を生き抜き、「調和ある世界の発展に主体的に貢献できる人物」（本校の地歴・公民科のめざす生徒像）へと成長するためには、歴史科目を通じて「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度」を育み、「多面的・多角的な考察や深い理解を通して、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める」こと（新学習指導要領）が重要である。このような資質・能力を育むためには、学習内容を人生や社会のあり方と結びつけて深く理解する「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められる。

歴史から何をどのように学ぶかを考える際に避けて通れないテーマが、全体主義やファシズム、軍国主義の問題であろう。これらは、国家権力などが「上から」押しつけただけでなく、「普通の人びと」が「下から参加（加担）」した部分も大きかったことが、これまでも指摘されてきた（アーレント、モッセ、吉見義明など）。このことは、現代社会においても「ポピュリズム」や「ナショナリズム」の形、例えば、SNS上の「炎上」や排除の動き、移民やマイノリティに対する差別の拡大、「異論を許さない」といった空気の醸成などといった形で現れることがある。生徒たちが、その視点に気づけば、歴史を傍観することなく、当事者意識を持って、主体的かつ深く学べるのではないだろうか。

本報告では、生徒たちが歴史の「傍観者」とならないための授業のあり方を模索した、2023～2024年度（67期生）の「日本史探究」の授業実践の一部を紹介する。次年度以降は、より体系的に構成された授業をめざし、研究を深化させていく予定である。

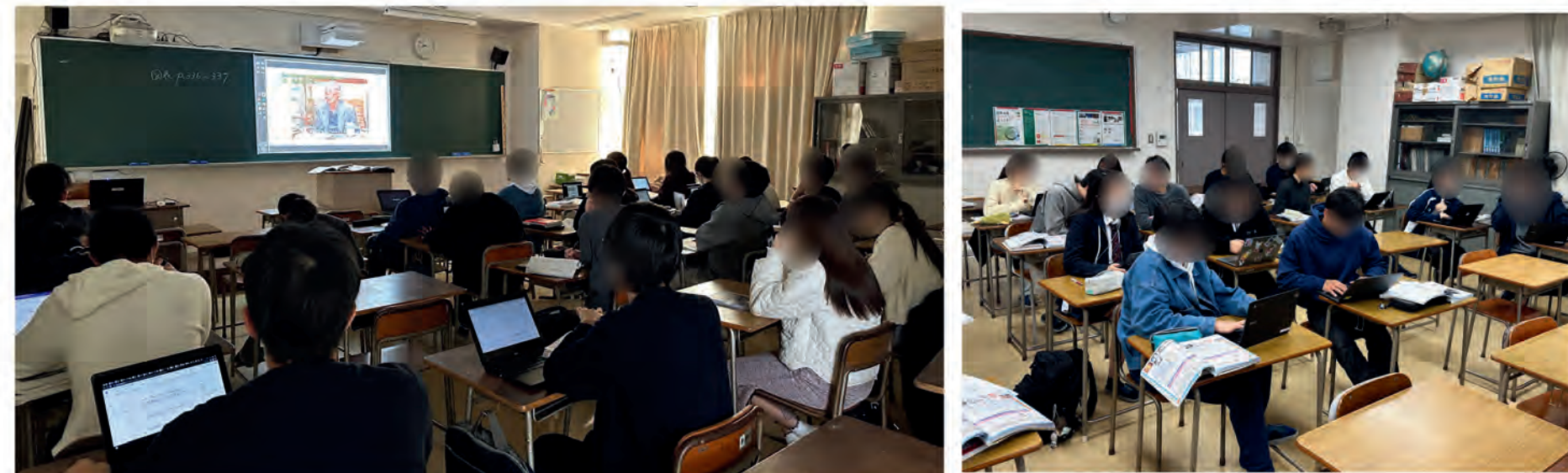
研究方法

歴史科目における「主体的・対話的で深い学び」とは、歴史的事象を、当事者意識を持って想像したり、現代的諸課題と関連づけながら考察したりすることを含み、具体的には、過去の戦争や差別、偏見といった問題を、問いを立て、現代社会の諸課題に関連づけながら、多面的・多角的に考察し、周囲と議論や対話を重ねながら、自分自身の意見を表現することをさす。「日本史探究」には、科目のまとめとして、現代日本の課題を探究する学習項目が設置されているが、生徒たちがより自然な形で主体的・対話的に深く学ぶことが重要だと考え、単元の学習事項に盛り込む形の授業を模索した。その際、必要となるのが、単元を貫く問いと、それに対する歴史の見方・考え方、概念である。そこで、取り上げたいのが、自分自身を含めた「普通の人びと」が、「下から参加（加担）」したという現実について考えること——この切り口から、さまざまな歴史的事象を考察するという授業のあり方を検討した。

本報告で取り上げる授業実践では、ハンセン病に対する差別や偏見、大政翼賛会に関連するプロパガンダ、満蒙開拓団内部で起こった悲劇、関東大震災時に広まった流言と結果としておこった虐殺などを取り上げた。これらの歴史的事象に対し、共通で「市民による『下から』の参加」「『普通の人びと』がどのように行動したか」という切り口や視点を取り入れて、生徒たちに考察させた。実践は、単元の内容に組み込む形で、1時限全部、もしくは一部を充てた。授業者による解説（講義）は極力減らし、生徒が自身の知識・技能を活かして、映像を含む各種資料を読み解き、ペアで話し合いながら理解を深めるという形をとった。

授業実践

「隔離」という病？
～ハンセン病の歴史から考える～



ハンセン病を取り上げた一連の実践の一つ。1907年の「癩予防ニ関スル件」に基づき、現在の大阪市西淀川区中島の海拔0m地帯に公立のハンセン病療養所「外島保養院」が隔離収容施設として1909年に開設された。入所者が増え、移転が検討されたが、候補先の地元住民による反対運動によって移転は断念され、同じ場所での増設が決まった。しかし、1934年、室戸台風が療養所を直撃し、200人近い人びとの命が失われた。

- コロナ禍初期（2020年春）の新聞記事を複数読み、偏見や差別、同調圧力について考える（個人→ペアで共有）
- 室戸台風による災害を生き延びた入所者の証言映像（DVD「外島保養員から邑久光明園へ」）を視聴（全体）
- 古代（「癩者」）から近代までのハンセン病の歴史を概観した上で、近代以降のハンセン病政策の問題について考える（講義）

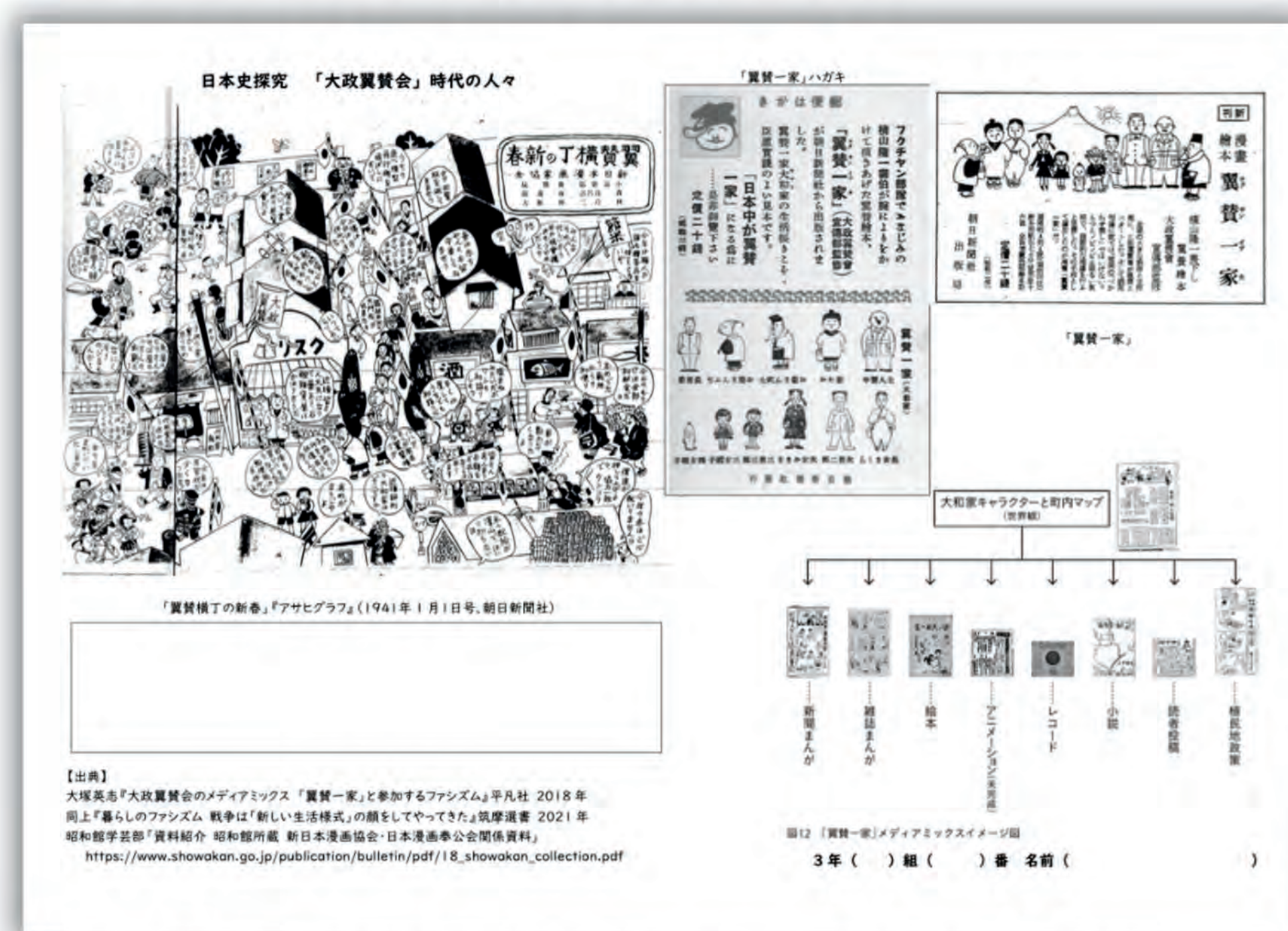
考察・結論

ここでは列举しないが、生徒のふりかえり（ワークシート）の記載には、「既存の価値観が覆された」などのコメントが多く、取り上げた歴史的事象が、自分自身や現代の社会と無関係ではないと痛感した生徒が大半であった。歴史の傍観者とならないために、当事者意識を持って想像をめぐらせ、他者と対話しながら、主体的に深く考察することができたのではないだろうか。今後の研究においては、生徒の成果物やふりかえりの分析も詳細に行いたい。

主要参考文献

- 朝日新聞デジタル 関東大震災 100 年 <https://www.asahi.com/special/kanto-daishinsai/docs/>（最終閲覧日：2025年1月14日）
- 飯島渉・磯谷正行・井上弘樹・古澤美穂（編著）『感染症でまなぶ日本と世界の歴史－医学・歴史学とつむぐ歴史総合－』清水書院 2024年
- 大阪府済生会ハンセン病回復者支援センター・外島保養院の歴史をのこす会編『大阪にあったハンセン病療養所 外島保養院』大阪市保健所感染症対策課 2017年
- 大塚英志『大政翼賛会のメディアミックス「翼賛一家」と参加するファシズム』平凡社 2018年
- 同上『暮らしのファシズム 戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩選書 2021年
- 『国立ハンセン病資料館 常設展示図録 2020』国立ハンセン病資料館 2020年（2022年改訂）
- 「戦場体験放映保存の会」サイト（桂川慎一さん手記）https://jvvp.jp/shinichi_katsuwragawa.pdf（最終閲覧日：2025年1月21日）
- 外島保養院の歴史をのこす会『外島保養院から邑久光明園へ わたしたちは忘れない 伝えたい』（DVD）2023年（非売品）
- NHK戦争証言アーカイブス「開拓団を救うため犠牲に」 https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001130365_00000（最終閲覧日：2025年1月14日）

「大政翼賛会」時代の人びと



大政翼賛運動がどのような形で「普通の人びと」の日常生活に入り込んでいったかを、当時のイラストや漫画など、文化的な作品から読み取る。

- 「翼賛横丁の新春」（1941年）からどのようなことが読み取れるか（個人→ペアで共有→全体で共有）
- 「翼賛一家」のキャラクターなどを紹介
- 「翼賛一家」は、大政翼賛運動を普及啓蒙する目的で、大政翼賛会と新日本漫画家協会という漫画家集団が協力してつくったことや、小説や新聞、漫画、レコード、アニメーションなどの文化を通じてプロパガンダが広められ、それに積極的に関わった人びとが多くいたことを知る。

「普通の人びと」はどのように行動したか
～満蒙開拓団と関東大震災の場合～



「集団自決」を生き延びた16歳青年（鳳凰開拓団）

- 桂川慎一さんの手記を読む（個人）
- ペアで内容と感想を共有

開拓団によってソ連兵に差し出され「性接待」させられた女性（黒川開拓団）

- 映像（NHK 戦争証言アーカイブス「開拓団を救うため犠牲に」の佐藤ハルエさんの証言）を視聴（全体）
- ペアで内容と感想を共有

※戦時以外の女性の犠牲の例（GHQ占領下の日本政府の援助により作られた「特殊慰安施設協会（RAA）」）にも言及
関東大震災における流言・飛語の実態

- 3人の証言を読む（個人）
- ペアで内容と感想を共有

今後の課題

今年度は単元内で不定期に一連の実践を組み込んだが、次年度以降は、年間計画に組み込む体系的な授業を構築し、評価についても検討したい。

また、報告者は現在、「高大連携歴史教育研究会」ジェンダー史プロジェクトチームに携わっている。今回報告した実践のなかでは、満蒙開拓団の「性接待」でのみ扱ったジェンダーの視点から歴史を読み替えることも、今後の研究では、本格的に導入する予定である